国立国語研究所学術情報リポジトリ

身体部位詞「口」の派生表現に関する一考察

メタデータ	言語:
	出版者: 国立国語研究所
	公開日: 2024-01-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 武中, 清香
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000161

国立国語研究所論集 (NINJAL Research Papers) 26: 197–205 (2024) Licensed under CC BY-SA
ISSN 2186-1358

身体部位詞「口」の派生表現に関する一考察

武中清香

一橋大学大学院 博士後期課程／国立国語研究所 研究系 非常勤研究員

要旨

「口」は身体部位として用いられるだけでなく，そこから派生した表現が多く見られる。本稿では，そのような派生表現について，国語辞典や『IPAL』，『分類語彙表』などと比較しながら，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いて意味を分類し，使用数を調査した。意味分類をすると，「言語」，「飲食」，「ものの出入り」，「表情・態度」，「種類」のように分けられたが，最も使用されているのは「言語」であり，身体部位として用いられていない「口」の中では 8 割以上の割合を占めていた。言語に関わるものや飲食に関わるものは，口本来の機能からも連想しやすいが，そこからさらに派生して意味が拡張していくと，「種類」のように，もとの意味から考えても意味が連想できないものも見られた。

「口」の派生表現は，慣用的に広く使われている表現も多くあるため，意味分類を提示する場合，例文があると分かりやすくなる。現在，例文が付与されていない『分類語彙表』においても，例文が提示されることによって，使われ方がより分かりやすくなることを示す *。

キーワード：身体部位詞，口，意味拡張，派生義，多義

1. はじめに

基本的に「口」は，身体部位として用いられるだけでなく，そこから派生した使われ方も散見される。そこで，本稿では『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下，BCCWJ）の用例をもとに基本義から派生した「口」の用例について分析する。どのような派生義が見られるのか，それらの派生義が基本義からどのように拡張していったのかを考察し，より基本的な「口」に近い使われ方にどのようなものが見られるかを明らかにすることを目的とする。

また，「口」は基本語彙として日常的によく使われる語彙であり，辞書にも意味の分類が記載されているが，それぞれに書かれている意味を見てみると，辞書によって分類の仕方が異なっていたり，一方の辞書にはあるが，もう一方の辞書には記載されていないものがあったりする。本稿では，学習者辞書用語彙資源の構築のため，国語辞典や『計算機用日本語基本名詞辞書 IPAL（Basic Nouns）』（以下 IPAL），『分類語彙表』（国立国語研究所 2004）を通して，基本語彙である「口」の派生義にどのようなものがあるか調べた。身体部位としての「口」から始まり，複数の意味に分類されてはいるものの，『分類語彙表』には例文がなく，記載されている意味がどのように使われているかが分からない。そのため，どのような表現において，例文提示がより必要で

* 本稿は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」（プロジェクトリーダー：小木曽智信）のサブプロジェクト「学習者辞書用語彙資源の構築」（プロジェクトリーダー：柏野和佳子）の研究成果である。なお本稿は，2023 年 1 月 8 日「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会における発表「「口」と「口」を含む慣用表現の BCCWJ 使用頻度調査」をもとに加筆修正したものである。

あるかを考えることも目的の一つとする。

身体部位ではない「口」は，意味拡張されて慣用的な表現として用いられているものもある。このような身体部位詞の意味拡張した語彙の使われ方について，慣用表現として論じている研究（田中 2002）もある[1]が，広く慣用的に使われていると判断しづらいものもある。よって本稿では，身体部位としての「口」ではないものについて，一律に慣用表現と呼ぶのではなく，派生義として扱う[2]こととする。

2. 先行研究

身体部位としてではない「口」の表現について扱った先行研究には，大塚（1994），田中（2002），三好（2008）などがある。

大塚（1994）は，口だけでなく，頭，顔，目，腹の身体部位の比喩的機能について分析したものである。ここで「口」は二つの機能があり，一つは食べ物を取り入れる機能，もう一つは音（声）を発する機能であると述べられている。機能の類似性や形状の類似性という観点から，何の比喩であるのかが分析されている。

また認知言語の観点から，田中（2002）では身体部位語「口」を含む慣用的な表現について，メトニミーとメタファーの相互作用について論じ，それらの表現がばらばらな集まりではなく，相互に結びついてある程度の体系をなしていることが述べられている。慣用表現の意味は構成語の意味から規則的に予測できないため，分析の対象から外れることが多いが，田中（2002）においてはこれらの慣用的な表現には連続性があり，体系をなしているということから，分析可能性があるということのケーススタディとして「口」の分析を行っている。

三好（2008）は語彙の対照研究のための，多義構造の記述モデルを構築するための研究で，その分析の例として，日本語とスペイン語の口を分析しているものである。三好（2008）においては，基本義と拡張義に分けて「口」の多義構造を構築しており，基本義の定義としては，「動物の飲食物の取り入れ口。頭部の下；唇・歯・舌を含む。消化の一部を担当。発声器官ともなる。」とされている。また，形状や位置，機能，様態，包括部位，被包括部位に基本義を分け，拡張義は形状，位置，機能，様態から出てきたものであることが述べられている。

3. 意味分類

3.1 国語辞典による意味分類

ここでは，『広辞苑』と『デジタル大辞泉』を取り上げ，国語辞典の中で「口」がどのような意味分類になっているかを確認する。

表 1 は広辞苑とデジタル大辞泉の分類の対応をまとめたものである。なお，表中の番号はそれ

[1] 田中（2002）において，「ここで慣用表現とは，その構成語の基本的な意味（典型例あるいは日常の身体経験に基づいて早い時期に習得される意味）から直接に予測される意味とは多少とも異なる意味を表現全体として表すもので，しかもその意味と形式の結びつきが慣習的に定着している表現を指す」と述べられている。
[2] 身体部位詞としてではない「口」の中にある慣用表現も含めて，ここでは派生義とする。

ぞれの国語辞典に記載されているものをそのまま使用している。

表1　国語辞典における分類と対応

デジタル大辞泉	広辞苑第七版
①動物の消化器系の開口部で，食物を取り入れる器官。	①動物が体内に食物を取り入れる場所。
②1に似ていることから （1）人や物の出入りするところ。 （2）容器の中身を出し入れするところ。 （3）物の外部に開いたところ。すきま。穴。	②動物の口に似たもの。 （1）外から内に通ずる所。 （2）物がはいり込み得る場所。 （6）内に通ずるあな。
③就職や縁組みなどの落ち着く先。	
④物事を分類したときの，同じ種類に入るものの一つ。また，その種類。たぐい。	
⑤ （1）物事の初めの部分。または，まだ始まったばかりのこと。発端。 （2）物の端。ふち。先端。切り口。 （3）雅楽の一曲や義太夫節の一段を細分したときの最初の部分。	②動物の口に似たもの。 （3）物事の始めの部分。 （4）浄瑠璃の一段の最初の部分。 （5）物の端部，へり，さき。
⑥1が飲食の器官であるところから （1）食べ物の好み。味覚。 （2）生活のために食料を必要とする人数。 （3）食べる量。	⑤（飲食の器官であることから） （1）飲食，生計。 （2）食料を必要とする人数。 （3）味覚。
⑦1が言語器官であるところから （1）口に出して言うこと，ものの言い方。 （2）世間の評判，うわさ。 （3）口出しをすること，またその意見。 （4）話す能力。 （5）客の呼び出しがかかること。また，友人などの誘いがあること。 （6）意向，意見。 （7）歌などの詠みぶり。	④ものを言うこと。 （1）言葉，物言い，またうわさ。 （2）歌の詠みぶり。 （3）客からの呼び出し，転じて比喩的に，誘い。
⑧馬の口につける縄，口取り縄。	③動物や器物などの口に当てる具。 （1）馬などの口につけるなわ。 （2）器物の口をふさぐためのもの。
⑨直径，さしわたし。	
⑩（助数詞） （1）刀剣などを数えるのに用いる。 （2）ものを食べる回数をいうのに用いる。 （3）寄付や出費などの分担の単位として用いる。	⑥（助数詞） （1）食べ物を口に入れる回数。 （2）申込みや割当ての単位を数える語。 （3）刀剣の数を表すのに添える語。

広辞苑第七版では，大きく分けて六つに分類されている。身体部位ではない「口」は②から⑥まであり，⑥には助数詞として使われているものを挙げている。またデジタル大辞泉はより細かい分類がされており，全体で10に分類されている。③「就職や縁組などの落ち着く先」や④「物事を分類したときの，同じ種類に入るものの一つ。また，その種類。たぐい。」⑨「直径，さしわたし。」は広辞苑にはないものである。また，広辞苑には「動物の口に似たもの」が同じ分類としてまとめられているが，デジタル大辞泉では②と⑤のように分けて記載されている。

3.2 IPAL による意味分類

次に IPAL の分類を見る。広辞苑やデジタル大辞泉で見られたような助数詞としての使われ方や馬などの口につけるなわの意味は記載されていないが，それ以外の意味は同様に見られる。また，デジタル大辞泉にある「物事を分類したときの，同じ種類に入るものの一つ。また，その種類。たぐい。」の意味は，「ある人やものが，［連体修飾部で表される］ある範疇に含まれることを示す。」のように記されているという特徴がある。

表 2 は IPAL の分類をまとめたものである。なお，表中の番号は IPAL の記載通りである。

表 2　IPAL における分類

01：動物の顔にあり，そこから飲食物を取り入れる器官。 「彼女はいつも口を押さえて笑う。」	04：そこから中に物を出したり入れたりする部分。（01 からのメタファー） 「袋の口をきちんと閉める。」
02：話す活動をつかさどり，象徴するものとしての「くち 01」。また，話し方やものの言い方。（01 からのメトニミー） 「お前も口が減らないやつだなあ。」「彼は口が達者だ。」	05：生活していくための落ち着き先。（01 からのメタファー） 「仕事の口を探す。」
03：食べることを象徴するものとしての「くち 01」。また，その食べ物を味わう感覚。（01 からのメトニミー） 「あの人は私の料理にちっとも口を付けなかった。」「私の料理は口に合いませんか？」	06：ある人やものが，［連体修飾部で表される］ある範疇に含まれることを示す。（04 からのメタファー） 「おとなしそうな学生だがあれも過激派の口だ。」

4. 現代日本語書き言葉均衡コーパスでの調査結果

4.1 調査方法

中納言を用いて BCCWJ を調査した。長単位検索でキーの部分を語彙素，口として検索した。ランダムで 1000 例を抽出し，地名などを取り除いた 983 例を分析対象とした。

4.2 分類の基準

意味分類については, 3 節における辞書や IPAL の分類をもとに「言語」「飲食」「ものの出入り」「表情・態度」「種類」の五つに分類した。これらを分類するうえでまず，身体部位に関連するものと身体部位ではないものの二つに大きく分けた。そこから，口としての基本的な機能という観点から，「話すこと」「食べること」の二つに分け，それぞれ「言語」「飲食」とした。また，「話すこと」「食べること」以外で身体と関わりのあるものに，顔の表情や態度を表す用例が見られたため，それらを「表情・態度」と分類した。

次に身体部位ではないものについて，口の形状に近い働きをしているものを「ものの出入り」と分類した。松本（2000）において，「人間の口は，首・胴体の空洞部（食道など）へ続く，顔の空隙部分（空隙そのものあるいはその輪郭）であり，食物などが出入りする部分である。物体部分詞としての「口」も，これらの位置，形状，機能の類似性に基づくものである」と述べられているが，「ものの出入り」はまさに身体部位の口の形状や機能の類似性に基づき，物体を表ししているものを分類した。さらに，口本来の位置，形状，機能についても類似性が特に見られず，

人や物が一つの範疇であることを表し，なおかつ連体修飾になっているものについて，「種類」と分類した。

4.3 意味分類と用例数

983 例の「口」のうち，身体部位として使われているのは 353 例であり，身体部位ではない「口」は 630 例であった。表 3 は身体部位ではない「口」の分類とそれぞれの用例数である。それぞれ「言語」，「飲食」，「ものの出入り」，「表情・態度」，「種類」に分けた。（　）内は BCCWJ のサンプル ID である。

表 3　身体部位ではない「口」の分類と用例数

分類	用例数	例文
1）言語	551	そんな話を口にすることはなかった。（LBo9_00065）
2）飲食	31	甘いものはほとんど口にしていないのです。（OB1X_00158）
3）ものの出入り	23	実験中，容器の口を人に向けない。（OT23_00025）
4）表情・態度	16	口をとがらせた。（LBj9_00066）
5）種類	9	荷台で眠っているあんたの友だちも，アメリカに憧れて国境を越えたくちか？（PM12_00014）

身体部位ではない「口」630 例の中で，言語が 551 例と最も多く，全体の 8 割以上を占めていた。さらに，「飲食」は 31 例，「ものの出入り」は 23 例，「表情・態度」は 16 例，「種類」は 9 例という順に続いている。また，IPAL との対応についても見てみると，BCCWJ の用例ともほとんど対応しているが，IPAL05「生活していくための落ち着き先」の使われ方をしている「口」は見られなかった。今回 BCCWJ から抽出した用例数が 1000 例であったため，これよりさらに多くの用例を見れば，「生活していくための落ち着き先」としての使われ方が見られると考えられる。さらに，本稿では，IPAL02 を「言語」と「表情・態度」の二つに分類した。前述したように，本稿では，「言語」について，「話す」「言う」のような口からの音声機能が働いているものと，音声機能が伴わない顔の表情や態度に関するものを別の分類とした。大塚（1994）において，口は食べ物を取り入れる機能と，音（声）を発する機能の二つがあると述べられているように，上位二つの分類はやはり「言語」と「飲食」であった。しかし，口の身体部位詞の機能としては，飲食に関わること，言語に関わることが挙げられるのにもかかわらず，用例数を見ると，言語に関わる口が全体の 8 割以上を占めているということから，身体部位の口から派生していくにつれて，飲食に関する表現よりも言語に関する表現のほうが増えていったと考えられる。

5. 考察

5.1 言語に関わる口

前述したように，身体部位ではない「口」の中で，言語に関わる口が最も大きな割合を占めていた。IPAL の記述にもあるが，言語に関わる口には，「話す活動をつかさどり，象徴するものとして」の口があり，話し方やものの言い方においても口が使われている。

具体的には「口にする」「口に出す」のような話す行為自体を表したり,「口が軽い」「口が悪い」のような話し方に関わることを表したりするものが見られた。

田中（2002）ではこのような言語に関わる口の中でも，「口を開く」「口を閉ざす」「口に出す」のようなものが「〈口の開閉〉メトニミー」として説明されている。また, メタファーとして「口がかたい」「口が軽い」「口が重い」のような表現が挙げられている。これらのメトニミーが,「口」の多様なメタファーを支えていると述べられている。

（1） はいたスリッパを，爪先でいじっていたかと思うと，ふいに口を開く。 （LBe9_00067）
（2） なお，受験年齢や就職時など，不安感が強まるときにはわがままも受け入れて，しっかり支えていき，大切な存在であることを，口に出して言う必要があります。 （LBn1_00024）
（3） 案外口が軽いんだねドルキ （OY15_20684）
（4） 口は悪いが，いつも陽気で，妙に正義感の強いところもある男だった。 （LBh9_00016）
（5） 四年ぶりに会ったというのに，お互い親しい口をきく雰囲気でもなかった。（LBo9_00197）

（1）から（5）は，BCCWJ で見られた言語に関する口の例である。言語に関する口は 4 節でも述べたように，身体部位ではない「口」の中で，最も大きな割合を占めている使われ方である。例文を見ると，単に言語に関する「口」だと一言で言っても，さまざまな表現があることが分かるが，やはり身体部位の口から連想されやすく，最も基本義に近い用法であると言える。

5.2 飲食に関わる口

次に飲食に関わる口について見ていく。身体部位としての口から飲食に関わる表現へ派生していくことは考えやすいだろう。例を見ていくと,「口に合う」「口にする」などニ格を伴う表現が多く，そのほかでは「口をつける」が見られた。

（6） 好き嫌いや口に合う合わないは，それからの問題だと思うし。 （OC13_01016）
（7） その日の午後の結婚式の披露宴でも，まったく酒を口にしなかった。 （LBs9_00225）

飲食に関わる口についても，身体部位の口との高い類似性が見られるため，基本義に近い用法であると考えられる。

5.3 ものの出入りを表す口（物体部分詞としての口）

次にものの出入りを表す口に分類したものを見る。ものの出入りを表す口には，以下の（8）から（10）のような例が見られた。

（8） ポットを掃除しているのですが口のところが狭くて上手く奥までブラシが届きません。 （OC08_04552）
（9） それをビニールのゴミ袋に入れ，しっかり空気を抜いてからまた口を縛る。（OB6X_00015）
（10） JR 品川駅高輪口十五分 （PM21_01067）

これらは松本（2000）において「物体部分詞」と呼ばれているものであり，物体部分詞としての「口」は人間の口の位置，形状，機能の類似性に基づくものであると述べられている。(8)（9）のような例は，「人間の口との類似性が最も高いとみなせる場合で，位置（〈空洞部に続く〉），形状（〈空隙〉），機能（〈出入り〉）の三つの類似性を持」ち（松本 2000: 325），身体部位としての「口」との高い類似性が認められる。また，（10）は物体部分詞として使われている「口」ではあるが，機能が（8）（9）とは異なっている。松本（2000）では（10）のような口について，「「口」の機能が特殊化しており，異なる意味の「口」だと言える」と述べられている。

大塚（1994）では，長い歳月の間に用法が慣用化されて，特定の意味をもつようになると，意味の拡大が見られ，このようなものの出入りを表す口は人間の口との機能，形状の類似性に着目して発展した表現であろうと述べられている。ものの出入りを表す口は，基本義から意味が拡大していく中で，形状の類似性から派生し，広く慣用的に使われるようになったものと考えられる。

5.4 表情・態度に関わる口

表情・態度に関わる口には（11）（12）のような例が見られた。

（11） 目尻を下げながら，土谷珠代は口をとがらせてみせた。 （PB19_00423）
（12） ところが，そのふたりは，ポカンと口をあけて，やはり同じ方角をながめている。 （LBs9_00225）

（11）（12）を見ると，表情・態度に関わる口も身体部位としての口から派生した用法であることが分かるが，言語や飲食のような口本来の機能からの派生とは少し異なっていると考えられる。つまり，身体部位の口が広く解釈され，口だけでなく，口を含む顔全体の表情にまで影響を及ぼす表現になっている。

5.5 種類を表す口

次に種類を表す口について見ていく。(13)（14）はその例である。この用法は，今回調査した用例の中でも特徴的なものであり，IPAL とデジタル大辞泉には見られたが，広辞苑には見られないものだった。

（13） 普通の仕事についたが続かず，自衛隊にたどりついたってクチだな （PB19_00171）
（14） もともとかなり飲めるくちだが，家で一切飲まないから，さほど“酒好き”というわけではないらしい。 （PB40_00006）

種類を表す口はほかの用法と比較すると，連体修飾の形であらわれるという点と表記にカタカナや平仮名が見られるという点で特徴的である。意味としても基本義から連想するのは厳しく，口の機能や形状からも類似性が見られないため，この用法は基本義から意味が大きく拡張したものだと考えられる。

5.6「口にする」の意味判断

身体部位ではない「口」の中で「口にする」という表現がしばしば見られる。身体部位ではない「口」の表現は，「口に出す」「口を開く」のような言語に関わるもの，「口に合う」「口をつける」のような飲食に関わるものといったように，その表現自体から意味が判断できることが多いが，「口にする」は前後の文脈を見ずに意味を判断することができないという特徴がある。4 節において，意味分類の判断基準について述べたが，「口にする」については前後の文脈から「話すこと」を意味しているのか，「食べること」を意味しているのかを判断する必要がある。

(15)　誰かが，ためらいがちにこんな疑問を口にした。　(LBm1_00013)
(16)　友人兼後援者は，おどけた挨拶に対して詩人が口にした一言にいくらか不安になっていた。　(PB39_00515)
(17)　太りはじめた二年前から，甘いものはほとんど口にしていないのです。　(OB1X_00158)
(18)　後藤は，本当に具合が悪いらしく，麦茶しか口にしなかった。　(LBm9_00112)

(15)（16）における「口にする」は，言語に関わる意味として用いられている例である。また，(17)（18）は飲食に関わる意味として使われていることが分かる。これらはいずれも前後の文脈から判断しなければ，どのように使われているかが分からない。このように分類を示す場合は，文脈からの判断が必要なものもあるため，意味だけでなく，用例も載せるべきであろう。

6. おわりに

以上，身体部位詞「口」の派生した表現について見てきた。BCCWJ の用例から分類をすると，「言語」，「飲食」，「ものの出入り」，「表情・態度」，「種類」のように分けられたが，最も使用されているのは，言語の口であり，これが基本義に最も近いものであると考えられる。言語に関わるものや飲食に関わるものは，口本来の機能からも連想しやすいが，そこからさらに派生して意味が拡張していくと，「種類」の口のように，基本義から考えても意味が連想できないものも見られた。

また，「口にする」のように前後の文脈を見なければ，意味の判断が難しいものも見られた。「口にする」という表現は，言語に関わる「口」の 551 例のうち約 25 パーセントにあたる 136 例，飲食に関わる「口」の 31 例のうち 50 パーセントを超える 17 例を占めている。

出現の割合として高く，また慣用的に広く使われている表現の一つでもあるため，意味の分類を提示する場合，用例があると分かりやすくなると考えられる。現在，『分類語彙表』には例文が付与されていないが，意味分類とともに例文が提示されると，使われ方がより分かりやすくなる。また，『分類語彙表』では言語に関わる「口」がすべて身体部位の口に分類されている。言語に関わる「口」は口の多義の中でも大きな割合を占め，示すべき重要な基本的多義のうちの一つであると考えられる。そのため，『分類語彙表』においてもより詳細な分類が必要だろう。『分類語彙表』への例文の付与と分類については今後の課題である。

参照文献

大塚容子（1994）「日本語身体ことばにおける身体部位の比喩的機能」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』28: 135–147.
国立国語研究所（2004）『分類語彙表―増補改訂版』（国立国語研究所資料集 14）東京：大日本図書.
田中聡子（2002）「「口」の慣用表現―メタファーとメトニミーの相互作用―」『言語と文化』3: 5–20.
松本曜（2000）「日本語における身体部位詞から物体詞への比喩的拡張」坂原茂（編）『認知言語学の発展』317–346. 東京：ひつじ書房.
三好準之助（2008）「語彙の対照研究のための多義構造の記述モデル」『京都産業大学論集. 人文科学系列』38: 1–33.

使用辞書

情報処理振興事業協会（1997）『計算機用日本語基本名詞辞書 IPAL（Basic Nouns）』東京：情報処理振興事業協会技術センター.
新村出（編）（2018）『広辞苑』第七版. 東京：岩波書店.
松村明（監修）『デジタル大辞泉』https://dictionary.goo.ne.jp/（最終閲覧 2022 年 12 月 26 日）.

関連 Web サイト

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/（2022 年 12 月 19 日確認）
国立国語研究所 コーパス検索アプリケーション『中納言』https://chunagon.ninjal.ac.jp/（2022 年 12 月 19 日確認）

A Study on Expressions with the Body Part Word “Mouth”

TAKENAKA Sayaka

Graduate Student, Hitotsubashi University / Adjunct Researcher, Research Department, NINJAL

Abstract
The word “mouth” is not only used to signify a body part but also to express several other meanings. In this study, I investigate the meanings and frequency of usage of such expressions using the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese, in comparison with a Japanese dictionary, IPAL, and Word List by Semantic Principles. The meanings are classified into “language,” “eating and drinking,” “things coming in and out,” “expressions and attitudes,” “kinds,” and “other,” with “language” being the most frequently appearing. Expressions related to language and eating and drinking are easily associated with the basic functions of the mouth; however, others, such as those related to “kinds,” have meanings that have expanded beyond that.

Since many expressions with “mouth” are widely used idiomatically, they would be easier to understand if example sentences are provided in the semantic classification. I show that in the Word List by Semantic Principles, the presentation of example sentences can make the usage of the word “mouth” easier to understand.

Keywords: body part word, mouth, sematic extension, derivative meaning, polysemy